

大切なのは変化への順応ではなく、
変化を生み出す側になること

業界をリードする企業において重責を担う人物はどのようなキャリアを歩んできたのだろうか。マイクロソフト デイベロップメント株式会社の代表取締役社長と日本マイクロソフト株式会社の最高技術責任者(CTO)を兼任する加治佐 俊一氏は、Windowsが誕生し、世界中に広まってゆく過程の中でキャリアを築いてきた。「世の中を変えてゆく側に立って仕事がしたい」という想いを抱き、Windowsの開発、普及に携わってきた加治佐氏のキャリアとは――

マイクロソフト デイベロップメント株式会社
代表取締役社長 兼

日本マイクロソフト株式会社 業務執行役員
CTO (最高技術責任者)

加治佐 俊一

Windows 開発で大きな足跡を残した 1人の日本人開発者

我々が日々何気なく使っている Windows。日本語版をはじめ、さまざまな言語の Windows が世界中で使用されている。いまでこそ最新版 OS はリリースと同時に世界中で使用できるが、かつては英語でベースとなる OS を開発した後、各言語に対応した OS を個別に開発していた。そのため英語版以外の OS のリリースは遅く、セキュリティやバグの修正にも時間がかかっていたのだ。

マイクロソフトは Windows Vista や最新版の Windows 7 において、シングルバイナリでの開発を実現し、これら課題を解決。シングルバイナリ化により、言語に依らない 1 種類の OS を各言語パックに組み合わせて使用することが可能となった。これにより、全世界同時に最新版 OS を使用できるとともに、迅速なアップデートを行えるようになったのだ。

いまや OS 開発のスタンダードとなったシングルバイナリ開発。今から 10 年以上前、当時の OS (Windows NT/2000) においてシングルバイナリ開発に挑み、プロジェクトを主導していた日本人がいる。日本マイクロソフト株式会社で最高技術責任者 (CTO) を務めている加治佐俊一氏である。

大阪万博で見た展示に感激し、 コンピュータの道に進もうと決意

「コンピュータが世の中を変える」と幼少期から感じていたという加治佐氏。コンピュータについて知るにつれ、「エンジニアとして自分に何ができるか、みんなの仕事でできるだけ早く楽にできないか、コンピュータが役に立つ領域を広げられないか——」といったことを考えるようになったという。

そんな加治佐氏がコンピュータに興味を持ったのは、小学 5 年生の時に体験した大阪万博だった。IBM が運営するパビリオンを訪れ、強い衝撃を受けたという。館内には大型コンピュータが並び、ライトペンで画面にさわりマンガのストーリーを選べるようになっていた。選択によって異なるストーリーが進行し、最後はプリンタからマンガを印刷できる、という展示だった。「単純な仕組みでストーリーもシンプルでしたが、非常に感激したのを覚えています。コンピュータが世の中を変えていくのではないかと直感し、コンピュータを学ぼうと決意しました」

以来、コンピュータや情報技術への関心を抱き続けた加治佐氏は大阪大学の基礎工学部情報工学科へ進学。真剣に勉学に励まない学生は留年するという厳しい指導の中、加治佐氏はストレートで大学を卒業した。「早く独り立ちしたい」との理由から進学はせず、就職することに決めていたという。その当時、情報系を専攻した学生の進路は引く手あまたで、多くの選択肢があり、加治佐氏が就職先に選んだのはリコーだった。

コンピュータは、人の生活や仕事の中で役に立つものであるべきだ、という加治佐氏の考えと、リコーの行動指針である「お役立ち精神」が重なり、さら

に、所属学科からリコーへの就職実績はなく、チャレンジングな状態で入社できる、ということも決め手となったという。コピーや FAX などのオフィス機器で有名なリコーが当時注力していたのは、半導体やオフィス向けのコンピュータ (オフコン)。しかし、オフコンでのリコーのシェアは小さく、大手を追い掛けるチャレンジャーの立場だった。

「だからこそ、新しい技術を積極的に取り入れることもできるのではないか」と考えていた加治佐氏は、第一希望だったオフコンの部署に配属され、社会生活をスタートさせた。

入社1年でマイクロソフト本社へ。 アメリカでの仕事で大いに刺激を受ける

リコーでの最初の仕事は、オフコン向けユーティリティソフトウェアの開発。入社して数カ月ほど経ったころ、会社から「マイクロソフトの表計算ソフトをオフコンに載せられるようにしてくれ」との指示を受けた加治佐氏は、先輩社員と 2 人でアメリカのマイクロソフト本社に派遣されることとなった。

「ちょうど IBM 初の PC 『IBM PC』が登場したところで、その互換機もいろいろ出始めていました。マイクロソフト本社には、MS-DOS という非常にシンプルな同社の OS を載せた IBM PC 互換機が、ズラッと並んで動いていました」さまざまなマシンの上で同じソフトウェアが動くというのは、当時では画期的なこと。加治佐氏は大いに刺激を受け、「世の中が大きく変化している」と痛感した。その後、加治佐氏

は日本国内でしばらくデータベース関係の仕事をしてきたが、再度アメリカで仕事をやる機会を得る。

複数のプロセッサを載せたUNIXのマシンを作るというプロジェクトがリコーで立ち上がったが、当時は自社単独でマルチプロセッサ対応のUNIXを開発するのは困難だった。そこで加治佐氏が再びアメリカに渡って、現地の協力会社と共同で開発を進めることになったのだ。

パートナーとなったロサンゼルスベンチャー企業と1年半ほど仕事をし、そこで働く社員の発想力の違いや、人材の流動性が速いことに驚かされた。アメリカではベンチャー企業からの技術の売り込みも頻繁にあり、初めて知る技術も数多く、大いに刺激を受ける日々だったという。

力のある会社が推進することで世の中は変わる

マイクロソフトに転職する転機となったのは、通商産業省（当時）が主導していた「UNIXベースの日本共通OSの開発」を目指すシグマプロジェクトに参加したことだった。日本を代表するコンピュータメーカーから優秀な人材が集まり、日本で共通して使うOSの完成を目指したが、プロジェクトは失敗に終わる。「いくら優秀な人が集まっても、各社の主張が折り合わなければプロジェクトは上手くいかない。世の中を変えるためには、力のあるリーダーが正しいと信じたことを推進する必要があると感じました。プロジェクトを突き進めながらも、パートナーやお客様か

らフィードバックを受け、改善していった方が社会は変わるだろうと。同時に、『自分もそういった力の会社で働きたい』と思うようになりました」

そんな折、加治佐氏はマイクロソフト日本法人で社長を務めていた古川享氏と出会う。「君はUNIXでいろいろ面白いことをやっているが、君の作ったコードは本流のUNIXには入らない。それならマイクロソフトに来てOSを作らないか」と古川氏に誘われたのだ。「世の中はいろいろと変わっていく。それなら外に出た方が、もっと面白いことが待っているのではないだろうか」と考え、加治佐氏は転職を決意。90年代当時、転職は今ほど一般的ではなかったが、アメリカで働いていた経験も後押ししたという。

95系列とNT系列。どちらが生き残るか緊張感を持って開発に取り組んでいた時代

マイクロソフトへの転職後、加治佐氏はOS/2、Windows NTといったOS開発を担当することになる。「Windows NTの基本的な部分は、最新のWindows 7にも受け継がれています。当時は、Windows 3.1やWindows 95など、コンシューマー向けのOSを開発するチームと、サーバー向けのWindows NT系列を開発するチームの二つが競い合う非常に面白い状況。最終的にどちらか一つしか残らない中、『Windows NTが残るに決まっている』と思いつながら働いていました。面白くも、緊張感のある時代でしたね」

OSの開発はマイクロソフトだけで完結するもので

はない。Windows向けのハードやソフトが正しく動作するよう、パートナー企業と一緒に作り込んでいく必要がある。加治佐氏はそこに面白さを見出していたが、そのころのWindows開発はまず英語版ありき。β版では日本語が動かなくて当たり前で、日本語化対応について本社の方では全く考慮されていない状況だった。

そのような現状に問題意識を抱いた加治佐氏は、パートナー企業にも声を掛け、総勢50人ほどを集めてマイクロソフトのアメリカ本社まで乗り込んだ。そこで1年半ほどWindows NT 3.1の開発に従事し、日本語だけでなく中国語・韓国語にもOSレベルで対応するようにした。そして、Windows 2000の開発では世界の主要言語に対応するシングルバイナリ化を達成。それ以降、加治佐氏は日本向けWindowsの開発を統括してきた。

単体で動いていたものがすべてつながる世界に。OSにも新しい役割が求められる

加治佐氏は現在、マイクロソフトディベロップメント株式会社の代表取締役社長を務め、日本向け／日本発のソフトウェア開発で指揮を執る。

「日本の開発チームは、ローカライズの業務をほとんどやっています。グローバルな開発チームの一員として、世界各地の開発拠点と同一レベルで開発をしています。最近ではWindows Phoneの入力用インタフェース「カーブフリック入力」やIMEの実装を日本で行っています。ほかにも検索エンジン



「Bing」の検索結果をさらに適切にするアルゴリズムを考えるチームやWindows Live、カーナビの半数以上に搭載されているOSの開発チームも日本にあります」

以前のマイクロソフトでは、OS、Office、Xboxなどの開発グループが別々に仕事を進めていた。それが現在は、クラウドを通して、各グループが壁を越えて一緒になって開発に取り組むようになってきている。

「パソコン、携帯、サーバー、データセンター、ゲーム機とそれぞれ単体で動いていたものがクラウドでつながる世界になります。当然、OSにも新しい役割が求められるようになり、大きな変化が起きようとしています。もう一つ、タッチスクリーンが普及したことで、ユーザーインタフェースも変化しています。さらにXbox向けのKinectのように、人の動きを入力にすることもできるようになってきました。それぞれの領域で優れた技術を持つ会社はありますが、マイクロソフトはすべての領域をつなげることができません。いろんなものをつなげていくことで、日本発の面白い

取り組みができると思っています」

日本発のプロジェクトが数多く進行している日本マイクロソフト。それゆえ、同社のインターンシップに参加する学生にも「製品を進化させることとは、全く違う観点で仕事をやってもらっている」という。

変化を生み出す側に立てば、より楽しく仕事ができる

就職氷河期と言われる昨今だが、「コンピューターを仕事にしたい、と思ってコンピューターメーカーを迷いなく選んだ自分の学生時代と比べて、今では同じコンピューターを仕事にするにしても、環境、教育、医療などさまざまな選択肢がある。加えて、世の中が変化するスピードも速くなっています」と、加治佐氏は、選択肢が多様だからこそ就職先を選ぶ難しさがあつたことを指摘する。

「そんな状況ですから、自分が好きな領域をしっかりと見据えながら、自分を鍛えるために没頭できる時間を確保することが重要なのではないのでしょうか。そして、技術やお客様の動向を追いながら自分のスキルの幅を少しずつ広げ、新しい技術領域やチャレンジへの「渡り」を生み出していく。「渡り」を持つことで世の中の変化に対応するのではなく、変化を作っていく側で仕事できれば、より楽しく仕事ができるはずです。技術者の仕事は楽しくないと長く続けられません。コンピューターの仕事には、絶えず新しい動きがありますから、この仕事に興味がある学生の方には希望を持って飛び込んでほしいですね」

PROFILE

加治佐 俊一（かじさ・しゅんいち）

マイクロソフト ディベロップメント株式会社 代表取締役社長 兼
日本マイクロソフト株式会社 業務執行役員 CTO（最高技術責任者）

1959年、鹿児島県生まれ。82年に大阪大学基礎工学部情報工学科を卒業。同年、株式会社リコーに入社し、89年にマイクロソフト株式会社（現・日本マイクロソフト株式会社）へ転職。OS/2、Windows NT、Windows 2000などの開発に携わり、Windows XP、Windows Vistaなどの日本展開を技術面で統括する。2006年10月から日本マイクロソフト株式会社 業務執行役員 最高技術責任者（CTO）に就任。2010年4月にはマイクロソフト ディベロップメント株式会社 代表取締役社長となる。

